

忘れられた叡智を求めて

最終回

日本型リーダーシップの叡智とは、何か。

それは、欧米型リーダーシップとは全く違った思想。

欧米型リーダーシップの思想においては、マキャベリの『君主論』を挙げるまでもなく、「いかにしてリーダーシップを発揮するか」「いかにして優れたリーダーになるか」の思想が根底にある。

しかし、この日本という国においては、「リーダーとは、自ら意図してなるべきものではない」との思想が、永く語られてきた。

それは、一つの深みある叡智であろう。

なぜなら、現代の病は、「結果」に過ぎないものを「目的」にするということだからである。

例えば「創造性」。

日本型リーダーシップの叡智

現代においては、「いかにして創造性を身につけるか」「いかにして創造的な人物になるか」が論じられるが、創造性もまた、結果として身につくものであろう。

例えば、ピカソは、誰もが認める「創造的な画家」であるが、では、彼は、その生涯において、一度でも「創造的な画家になりたい」と考えたであらうか。

答えは、否であらう。彼の創造性は、自らを表現しようとの熱烈な創作活動の「結果」として、そこに生まれてきたものに過ぎない。

同様に、本来、リーダーシップとは、一人の人物が、一つの道を求めて生き、真摯にその道を歩んだとき、結果として、そこに生まれてくるものに他ならない。

日本型リーダーシップの叡智とは、まさにその思想。

その叡智と思想を伝えてくれる言葉は、数多くある。

そもそも東洋思想には、「桃李、もの言わざれども、下、自ずから蹊を成す」との中国の言葉もあるが、日本にも、「千人の頭となる人物は、千人に頭を垂れることができなければならぬ」との格言がある。

さらに、我が国の宗教的な世界においても、親鸞は、「親鸞、弟子一人も持たず」と語り、信者の人々を「同じ道を行く人」という意味の「御同行」と呼んだ。

しかし、ここに不思議な光景がある。実は、欧米においても、こうした「結果としてリーダーになる」という創発型リーダーが増えているのである。



田坂広志

[多摩大学大学院教授
シンクタンク・ソフィア
バンク代表]

例えば、ネットの世界で数千名のコンピュータ技術者が集まり開発された基本ソフト「リナックス」。このプロジェクトのリーダーであるリース・トールバルズは、決して強力なカリスマ的人物ではない。ただ、「世界中の人々が喜んでくれるソフトを作りたい」との思いを、誰よりも深く持っていただけである。

これからの世界に求められるリーダー像は、資金や組織や権力によって人々を強力に率いるリーダーではない。むしろ、その高き志や深い共感によって、自然に周りに人々が集まってくるリーダーに他ならない。

いま、世界は、我々日本人にとって懐かしい光景に向かっていている。我々は、その彼方を見つめるべきであらう。